学術論文

大正～昭和前期の演説における接続表現の使用状況
―雑誌と比較して―

川　島　拓　馬

富山大学人文科学研究第 80 号抜刷
２０２４年２月

学術論文

大正～昭和前期の演説における接続表現の使用状況―雑誌と比較して―

川　島　拓　馬

1. はじめに

近代の様々な文章について，その文体的特徴を反映する言語表現が存在すると思われる。文末表現や副詞など，指標となり得る要素はいくつかあるが，本稿では接続表現に着目する。接続表現は文章のジャンルや文体によって出現傾向に差があることが知られており，現代語を対象とした研究では石黒ほか（2009）や馬場（2018a,b），落合（2018）などで具体的な知見が示されている。また近代期における言語資料にも様々なものがあるが，本稿では演説を対象とする。演説は近代以降の社会的・政治的変革によって新しく登場したメディアであり，公的な内容を音声で伝達するものである。そうした言語的メディアは現代においても活発に用いられており，近代語の発達や現代語への変遷を考える上で重要と言える。

本稿では，大正から昭和前期にかけて行われた演説資料を取り上げ，接続表現の使用について考察を行っていく。目的としては近代語における公的表現の様相を明らかにすることだが，本稿ではそのための一つの足掛かりとして，演説においてどのような接続表現が用いられるのか，その概要を記述するとともに，考えられる特徴について述べたい。

2. 調査の概要

2.1 調査対象資料

本調査では，近代の演説資料として金澤・相澤（編）（2015）を用いた。これは，2010年にデジタル化された形で一般に公開・販売された『SP盤貴重音源 岡田コレクション「学術研究用デジタル音源集」』を文字化したものである。元の音源は，1915（大正4）年以降に録音された演説・講演などを収めたもので，近代語資料として重要な価値を持つと言える。演説等は政治家，軍人，実業家，教育者，文化人などによって行われ，本数は全体で135本，総録音時間は18.5時間分に及ぶ（金澤2016）。

日本において演説や講演の記録が音声として残されるようになったのは，上記の通り1915年以降のことであり，そうした演説・講演資料に着目して近代語の分析を行った先駆者として清水康行氏が知られる（例えば清水1988など）。清水氏の指摘する演説レコードの言語資料的性格を，次頁にまとめて示す[1)]。

【表 1】演説レコードの言語資料的性格

	演説レコード	東京落語レコード
表現の場面	公的演説（一方的，堅い表現）	大衆芸能（くだけた会話形式）
想定聴取者	不特定多数 or 支持選挙民	不特定多数 or 贔屓客
演説者の階層	社会的指導階層	寄席芸人
演説者の出身地	さまざま（東京以外が多い）	ほぼ江戸・東京
録音時期	1915 年～，主に 1920 年以降	1900 年代初頭より
録音時期の特定	有利←演説者の動向の記録	主に発売時から推定
文字言語の介在	原稿用意・持込みの可能性	定型の原稿・脚本なし

本稿で使用した講演・演説資料を用いた研究例としては相澤・金澤（編）（2016）があり，音声・文法・文体の各側面から多数の論文が収められている。金澤（2016）は「演説・講演レコードに遺された日本語の録音は，全体として20世紀前半の公的な堅い言い回しの口語資料として評価することができる（p.10）」と述べており，当時の全国共通語的な性格の反映された資料として捉えることができる。このような，不特定多数に向かって公的な場面で用いられる言語表現は近代期におけるメディアの発達とともに見られるようになったものと言え，新聞や論説文など他のジャンルの文章にも同様の特徴を持つものは見られる。そしてこうした資料における言語表現は，現代語に連なるものと言うことができるだろう。

2.2 接続表現の認定

本調査では，談話展開の指標として機能する接続表現を演説資料から抽出し，どのような接続表現がどの程度用いられているかを明らかにする。そこで問題となるのが，接続表現をどのように認定するかということである。工藤（1977）などで指摘されているように，接続詞と副詞は連続的であり，例えば「特に」や「さらに」が接続詞なのか副詞なのかといった判断は難しい（石黒ほか2009）。また，「それにもかかわらず」や「換言すると」といった連語的な接続句を含めるかどうかも問題となる。

このように，何をもって接続詞と捉えるか自体，簡単な問題ではない。本稿では，演説資料にどういった接続表現が出現するのか，その全体的な傾向を把握したいという目的を踏まえ，可能な範囲で「接続詞」を広く捉えることが有益であろうと考える。ひとまず接続機能を持つ形式群を広く収集・分析した後で，個別の形式をどのように区分できるか，どのような特徴が見られるかを考えていくことが妥当と思われる。また，現代語の文章において接続表現の使用状況を調査した研究においては接続機能を持つ形式を広く対象としており（平川1991，石黒ほか2009，石黒2010など），そうした研究との連続性を考える上でも対象とする表現はできるだけ包括的に考えた方がよいと言える。従って，これらの先行研究に倣う形で，本稿において

も「接続表現」の語を用いることとする。

接続表現の認定にあたっては，最も具体的に接続表現を規定している石黒ほか（2009）の規定に従う。そこで挙げられている接続表現のリストにあるものは，本調査でも対象に含めた。もちろん石黒ほか（2009）は現代語を対象とした研究であり，近代演説資料における接続表現を網羅してはいない。リストにない形式については田中（1984）も参考にし，また筆者の判断によって接続表現に含めたものもある。なお，本稿では文頭における接続表現のみを調査対象としているが，これも石黒ほか（2009）に従った[2)]。演説は音声によって実現した言語資料であり，文をどのように認定するかも問題となる。本稿では便宜的に，使用資料である金澤・相澤（編）（2015）での文認定，すなわち書き起こしでの表記に依った。

3. 調査結果

調査対象とした演説資料の総文数4,207文に対し，文頭に接続表現を持つ文は計983文であった。比率としては23.4%に当たる。接続表現の出現頻度について文章のジャンルごとに調査した石黒ほか（2009）によると，社説，コラム，エッセイ，小説における接続表現の出現頻度はいずれも10%前後であり，次いで学術論文においては25%程度であった。また，音声として実現した資料である大学での講義談話においては36.9%に上っており，書き言葉資料に比べてかなりの高頻度で接続表現が出現していることが分かる。

本調査で対象としたのは大正～昭和前期の演説資料であり，当然のことながら，先行研究とは資料のジャンルも年代も異なっており，条件を揃えた調査になっているわけではない。そのため，現時点でこれらの数値のみを見て何らかの積極的な主張を行うことは難しい。よって「近代演説における接続表現の出現頻度は，現代語の一般的な書き言葉よりも高く，学術論文と同程度であるが，話し言葉である大学講義よりは低い」と言うことは可能であるが，あくまでも単に事実を述べたものと解釈されたい。とはいえ，調査の結果，演説資料において接続表現がある程度出現することは確認でき，近代の演説資料を対象に接続表現の分析を行うことに一定の意味は認められると思われる。

上記の接続表現の出現頻度は，各演説において一様に見られるのではなく，偏って分布している。つまり，接続表現が極めて高い頻度で用いられる演説もあれば，ほとんど用いられない演説もあるということである。以下では，調査対象とした演説135本を行った演説者89名について考える[3)]。一定以上のデータ量を確保するため一人が行った演説の総文数で見たときに中央値以上となる演説者について見ると，接続詞の出現頻度の上位と下位では次のような結果になった[4)]。

【表 2】演説者別に見る接続表現の出現頻度（左側が上位，右側が下位）

	演説者	比率（接続表現数 / 総文数）		演説者	比率（接続表現数 / 総文数）
1	高橋是清	53%（17/32）	1	星一	3%（3/89）
2	小笠原長生	46%（16/35）	2	服部三智麿	4%（1/28）
3	犬養毅	44%（25/57）	3	長岡外史	4%（2/54）
4	田中智学	41%（31/76）	4	丸山定夫	6%（2/32）
5	成瀬達	39%（16/41）	5	重光葵	7%（2/30）

このように，接続表現の使用頻度には大きな差が見られる。頻度の高い事例を見れば，3文に1文は文頭に接続表現が用いられている場合も決して珍しくない。その一方で，接続表現の出現がかなり稀な場合も散見される[5)]。このような差が生じた理由を明確に説明することは難しい。一つ要因を挙げるとすれば，文語調の表現の多い訓示や，文語調の文句が引用されている演説では，接続表現の使用が少なくなっていることが指摘できる[6)]。このような場合では，簡明な表現を重ねていくようなスタイルとなり一文が比較的短く，総文数は多くなるものの接続表現はさほど用いられないために，全体として比率が低くなっている。これより，演説において必ずしも接続表現が高頻度で用いられるわけではなく，個人の言語使用における選好という側面も小さくないことが分かる。どのような文章・談話において接続表現が頻りに用いられるのかを解明することは重要であるが，広範な資料の分析が必要とされる問題であり，本稿では多く出現する接続表現の例を見ることでその足掛かりを掴みたい。

4. 分析と考察

4.1 接続表現の使用状況の概観

調査の結果得た接続表現の用例数を以下に示す。接続表現の意味分類については市川（1978：pp.89-93）の「順接型」「逆接型」「添加型」「対比型」「転換型」「同列型」「補足型」の7つの類型に従っている。各類型の下位区分についても同様である。語形の細かな違いについては，石黒ほか（2009）を参考に，まとめて代表形を設定したものがある。

<u>【順接型】274</u>

〔順当〕ゆえに（49），そこで（25），従って（22），それゆえ（21），で（20），ここにおいて（20），されば（15），しからば（12），だから（9），それで（8），ですから（7），以上（7），よって（6），これがため (に) （5），ついては（5），さるがゆえに（4），これによって（3），かるがゆえに（2），しかれば（1）

〔きっかけ〕そうすれば（3），してみると（2），すると（1）

〔結果〕かくて（16），その結果（6），かように（5）

【逆接型】224

〔反対・単純な逆接〕しかし（54），しかしながら（45），が（10），だが（5），けれども（5），しかれども（4），さりながら（1）

〔背反・くいちがい〕しかるに（95），であるのに（1），にもかかわらず（1）

〔意外・へだたり〕ところが（2），それを（1）

【添加型】295

〔累加・単純な添加〕しかして（65），そうして（30），そして（10）

〔序列〕次に（9），第一に（5），続いて（4），第二に（3），まず（2），おわりに（2），最後に（2），はじめに（1），最初に（1），第三に（1），次いで（1）

〔追加〕しかも（18），それから（16），さらに（15），かつ（4），のみならず（3），それのみならず（2），そのうえ（2），加うるに（1）

〔並列〕また（88），同時に（4），はた（3）

〔継起〕その後（3）

【対比型】15

〔比較〕むしろ（5）

〔対立〕一方（2），却って（1），反対に（1）

〔選択〕あるいは（6）

【転換型】16

〔転移〕ところで（2）

〔課題〕さて（11）

〔区分〕では（3）

【同列型】130

〔反復〕すなわち（68），要するに（17），換言すれば（7），つまり（5）

〔限定〕殊に（21），たとえば（9），特に（3）

【補足型】29

〔根拠づけ〕なぜなら（4），なぜかというと（2），というのは（1）

〔制約〕ただ（10），ただし（2）もっとも（2）

〔補充〕なお（8）

使用頻度の高かった接続表現を，上位25位まで次頁の表に示す[7)]。

【表 3】演説における接続表現上位 25 位とその頻度

	接続表現	頻度		接続表現	頻度		接続表現	頻度
1	しかるに	95	10	従って	22	19	されば	15
2	また	88	11	それゆえ	21	19	さらに	15
3	すなわち	68	11	殊に	21	21	しからば	12
4	しかして	65	13	ここにおいて	20	22	さて	11
5	しかし	54	13	で	20	23	が	10
6	ゆえに	49	15	しかも	18	23	そして	10
7	しかしながら	45	16	要するに	17	23	ただ	10
8	そうして	30	17	かくて	16			
9	そこで	25	17	それから	16			

この結果から分かることとしては，演説における接続表現は，頻用されるものもあれば非常に使用が稀なものもあるという点でばらつきが見られるが，特定の形式に極端な偏りを見せているわけではないということである。石黒ほか（2009）で挙げられている様々なジャンルの書き言葉資料における接続表現の使用状況を見ると，使用頻度1位の接続表現が全体のおおよそ14 ～ 24%を占めており，また講義談話を調査した石黒（2010）では最も使用頻度の高い「で」は全体の44.7%（1,108/6,717）を占めていたことが明らかになっている。これに比べると，演説における接続表現で頻度の高い「しかるに」や「また」も全体の9%程度であり，偏りはあるものの顕著とまでは言いがたい。

講義談話において極めて高い頻度で用いられていた「で」は演説においてはそこまで頻りに用いられるとは言えず，同じ独演調の談話資料であっても接続表現の使用状況は異なっていることが分かる。さらに石黒（2010）では，講義における接続表現使用の特徴として，順接基調であることを挙げ，逆接基調である新聞と対照的であると指摘している。一方，演説においては上位に順接の接続表現はあまり出現しておらず，全体的な用例数を見ても順接が逆接を大きく上回るといった状況にはない[8)]。この点からも講義談話とは様相が異なっていると言え，順接的な談話展開が特徴的といった傾向性は見出しがたい。もちろん，逆接表現を基調としているとも言えない。

以上，全体的な傾向として指摘できることは少ないが，同様の目的で比較できる別の言語資料の結果と照らし合わせれば，より有益な知見が得られる可能性がある。既存のコーパスほど大規模でなくてもよいが，まとまった量のテキストに対して同様の調査を行い，基礎的なデータを収集することによって演説における接続表現使用の特徴も一層明らかになると思われる。具体的には次節でも先行研究を参照する形で言及する雑誌等の論説文や，あるいは現代の演説などの資料が想定できるが，いずれも今後の課題である。

4.2 個別の接続表現についての分析

ここでは個別の接続表現について幾つか取り上げ，演説における接続表現の使用にどのような特徴が見られるかについて考える。具体的な手法としては，演説で使用された接続表現について，書き言葉資料と比較した上で演説の特性を明らかにする。書き言葉資料の調査には『日本語歴史コーパス』および『昭和・平成書き言葉コーパス』の雑誌のデータを用いたが，演説と時期を揃えるため，『太陽』の1917年と1925年のデータ，『中央公論』の1933年と1941年のデータを使用した。なお前者に関しては口語体の記事に限定した。もちろん，雑誌データから用例を抽出する際も，文頭の用例のみを計上している。以下では先の全体的概観において示した，接続表現の類型ごとに見ていくこととする。

4.2.1 順接の接続表現

演説において用例の見られた順接の接続表現の幾つかについて，上述の手順でコーパス調査を行ったところ，以下のような結果が得られた。

【表 4】演説と雑誌における順接の接続表現の出現頻度

接続表現	演説	演説（調整）	雑誌	雑誌（調整）	演説 / 雑誌
ゆえに	49	11.6	800	2.4	4.8
そこで	25	5.9	1,741	5.3	1.1
従って	22	5.2	1,992	6.0	0.9
それゆえ	21	5.0	411	1.2	4.0
で	20	4.8	777	2.3	2.0
ここにおいて	20	4.8	187	0.6	8.4
かくて	16	3.8	651	2.0	1.9
されば	15	3.6	369	1.1	3.2
しからば	12	2.9	492	1.5	1.9
だから	9	2.1	1,199	3.6	0.6
よって	6	1.4	85	0.3	5.6
その結果	6	1.4	144	0.4	3.3

先に表の見方を説明する。「演説」「雑誌」の列は，それぞれの調査資料から抽出した接続表現の用例数（粗頻度）を示している。また「調整」とある列は，1,000文あたりの調整頻度を計算し[9]，先述の用例数を補正したものである。右端の「演説/雑誌」の列は，演説の調整頻度を雑誌の調整頻度で割った値であり，これが1より大きければその接続表現が演説の方に出現しやすく，1より小さければ雑誌の方に出現しやすいことを示している。

この表からは，雑誌における接続表現の使用状況と比較した際に，演説においてどのような

接続表現の使用が目立つかということが分かる。雑誌に比して演説での使用の極めて多い接続表現として「ここにおいて」が挙げられる。演説での頻度が顕著に多いわけではないが，雑誌データにおける頻度が小さいことから，相対的に演説でよく用いられていると言える。以下に例を挙げる。

(1) 輿論は，凡て知識ある階級によって導かるるものである。ここにおいて政治家は，国民の指導者となって国民を導く，輿論を導く，ある場合には輿論を制するという力がなくてはならんである。（大隈重信「憲政ニ於ケル輿論ノ勢力」1916年）

(2) しかし我々は，決して現状をもって満足するものではなく，臥薪嘗胆二十年を新社是として，世界に雄飛せんとするものであります。ここにおいて，何が最優最大のこの栄誉をもたらしたかの原因を尋ね，従業者の持つべき信念について学ぶことが，必要となってくるのであります。（成瀬達「我等の信条」1936年）

雑誌コーパスを用いて順接の接続表現について調査した近藤（2021b）によると，「ここにおいて」は「主に文語体地の文で使用される，書き言葉的性質の強い語形（p.122）」とされている。漢文訓読によって生じた表現であり，歴史コーパス収録の近代小説には1例も用例が見られない。近藤（2021b）が「ここにおいて」と同じグループに区分している接続詞のうち，演説においても用例が見られたのは「ゆえに」「されば」「よって」「しかれば」「これによって」であり，先頭の3形式については表4にも出現頻度を示している。いずれも雑誌に対する出現頻度の比は高く，文語体の文章で主に用いられる点に特徴のある接続表現が演説でよく使用されていると言うことができる。これより，口頭で発せられる演説であっても，書き言葉的な性質が強く，「堅い」表現の使用が目立っていることが窺える。

ただし，文語体での使用に特徴のある語形だからといって，その接続表現の使用されている部分が取り立てて難解だったり堅い言い回しだったりするわけではない。比率の高い「よって」と「ゆえに」について以下に例を挙げる。

(3) しかるに一旦選挙が終わりました後，果たして幾人がその現行一致の態度をとる者がありましょうか。議会に営業税全廃運動のため上京せる委員が，常に憤慨するはこの点であります。よって私がここに諸君のご注意を願うところは，これ諸君が選挙の際，各政党の党議により決定する政党の政策を吟味せずして，候補者個人の政見を信用せらるるがためでありますから，外国のごとく諸君が候補者より政見を聞かるる時，候補者個人の政見を斥けて，その所属政党の政策を，その候補者を通じて聞き取らるるようせられんことであります。（武藤山治「政党ノ政策ヲ確ムル必要」大正末）

(4) 我々は政策を立つるに国家本意・国民本位として考えています。決して党利本位ではありません。現在の国状から見ますると，政治経済ともに未曾有の変局かと思います。これを処するには，更に更新一新の施設を要します。従って，新時代の機運に順応するところがなくてはなりません。よって私は我が民政党の主張に基いて，左の諸政策の実現せんことを期するものであります。（増田義一「立候補御挨拶並ニ政見発表」1936年）

(5) 私は初めてシンガポールで特別の拝謁を賜りました際に，皇太子殿下の御意を伝えられまして，閑院宮殿下から私にこういう御諚がありました。汝の見たるところ，汝の聞けるところを，そのまま詳しく国民全般に報道しても少しも差し支えはない，それは良いことである。こう仰せられたのであります。故にただ今から謹話申し上げることは，皇宮殿下並びに閑院宮殿下のお許しを受けておるのである，とご承知下さっても差し支えないのであります。（加藤直士「皇太子殿下御外遊御盛徳謹話」1921年）

(6) 今日我が国民の過半数は，地方農民・漁民，または都会地の中小商工業者であります。これらの人々は終日営々として働いて，わずかに一身一家を養っておる。これらの人々は，為替相場の動きを直接苦にすることは少ないのであります。故に外国為替のことにのみ注視すれば足れりとする政策は，根本において間違っておるのであります。

（高橋是清「金輸出再禁止に就て」1932年）

このように，演説は全体として口語体で話されており，接続表現の部分が，文語体によく出現するような書き言葉的性質の強いものになっているのである。文語体で主に使用される語形が口語体の文章においても多く使われていることは近藤（2021b）でも指摘されており，それは演説にも当てはまるものだと言える。

ただし，こうした傾向にうまく整合しない接続表現もある。「それゆえ」と「その結果」も相対的に演説での出現頻度の高い形式と言える。両者は近藤（2021b）で「主に口語体地の文で使用される，AとCの中間の語形[10]（p.122）」とグループ化されており，そこには取り立てて演説での頻度の高くない「そこで」「従って」も含まれている。すなわち，演説での用いられやすさという点で様相の異なる接続表現が同じグループにまとめられており，近藤の指摘する文体の差が，演説における出現頻度とは必ずしも一致しないことになる。「それゆえ」と「その結果」においてなぜそのような傾向が見られるのか，現時点では確たる説明の術を持たない。今後，個別の接続表現についてより詳細に調査・分析することによって明らかにしていく必要がある。一点述べるとすれば，「文語体での使用を主とする形式であれば演説で用いられやすい」とは言えるとしても，その逆は成り立たない可能性がある。

一方で，雑誌と比較して演説での使用がかなり少ない接続表現もあり，具体的には「だから」が該当する。雑誌に対する出現頻度の比は0.6となっており，雑誌においては頻用されるもの

の演説ではそれに比して用いられにくい形式と言える。これについても近藤（2021b）の指摘を見ると，「だから」は「主に会話文で使用される，話し言葉的性質の強い語形（p.122）」とされている。これより，話し言葉的な性質を持つ接続表現は演説での使用が非常に少なく，口語的な形式も高い頻度では用いられないことが分かる。

「だから」と同じグループとされている接続表現で演説でも用例が見られたのは「で」「それで」「すると」である。このうち表4で頻度を示しているのは「で」であるが，表4を見ると「で」は演説において雑誌の2倍の頻度があり，これは問題となる。この要因は，「で」の用法にあると考えられる。明治期の「で」について調査した劉（2023）によると，「で」は前の内容に関する内容を次々と述べていく「つけ加え」の用法が中心的であり，この特徴が演説という談話スタイルに合致したと考えられる[11)]。演説における「で」もこのように解釈して問題のない用例であった。以下に例を挙げる。

(7) 天壌無窮とは天地と同じく悠久［有窮］だということで，道は天地と同体である。日本国体は道であるから，天地とともに無窮である。で，人類をそれに同化しようというのが神の目的で，その静的運動だから天壌無窮の皇運と言う。

（田中智学「教育勅語の神髄」昭和初期）

(8) 隣国の関係を根本的に定めようと言えば，従来のごとき方針ではとても相手んなるわけのもんじゃない。それ故に，現在の内閣がいつまで続くんであるか，この方針なら自分も考え様があるということは，確かにこの隣国も考えておるのであるから，どうしてもこれに向かっても基礎を定めるということが必要である。で，いかなる仕事においても決して半年や一年で完成するもんではない。（犬養毅「新内閣の責務」1932年）

4.1節で述べたように全体的な出現傾向は異なるものの，石黒（2010）が指摘するように講義談話において「で」が顕著に出現することも示唆的であり，「で」が独演調の口頭談話において用いられやすいという特徴が確認できる。

以上まとめると，順接の接続表現に関して，典型的な書き言葉に主に出現する形式の方が演説においてはよく用いられ，典型的な話し言葉に主に出現する形式はあまり用いられないという点がおおよそ指摘できるだろう。

4.2.2 逆接の接続表現

先ほどと同様に，逆接の接続表現についても調査を行った。その結果を以下に示す。

【表 5】雑誌と演説における逆接の接続表現の出現頻度

接続表現	演説	演説（調整）	雑誌	雑誌（調整）	演説 / 雑誌
しかるに	95	22.6	1,779	5.4	4.2
しかし	54	12.8	7,290	22.0	0.6
しかしながら	45	10.7	964	2.9	3.7
が	10	2.4	1,522	4.6	0.5
だが	5	1.2	1,825	5.5	0.2
けれども	5	1.2	844	2.6	0.5
しかれども [12)]	4	1.0	104	0.3	3.0
ところが	2	0.5	1,500	4.5	0.1

逆接の接続表現の中で相対的に演説での使用頻度が高いと言えるものとしては，「しかるに」と「しかしながら」が挙げられるだろう。「しかるに」は雑誌でもよく用いられているものの，演説における接続表現で最も頻度の高かった形式であり，それによって比率が大きくなっている。「しかしながら」は演説での使用頻度は上位ではあるものの顕著に高いとまでは言いがたい。しかし雑誌においてもそこまで頻用されているとは言えず，雑誌と比較して演説でよく用いられる形式となっている。これは「しかし」と比較した際に明らかであり，演説において「しかし」と「しかしながら」はそこまで用例数の差はないが，雑誌では 7 倍以上の差があり，その様相は大きく異なっている。以下，用例を挙げる。

⑼ もし命と財産が，諸君のものであるならば，それに関係する法律規則を作るにあたっては，政府はいちいち，その持ち主に相談をせなければ，何事も作ることはできないはずである。しかるに，従来政府は，人民には一切相談をせないで，命と財産に関係する法律規則を，勝手に作りきたったではないか。　（尾崎行雄「司法大臣尾崎行雄君演説」1915 年）

⑽ 我が党は，林内閣が組閣に際し，その基礎を国民大衆の上に置かざりしことを遺憾としたに関わらず，なおかつ，挙国一致の精神に則り，第七十議会を通じて林内閣を支持し，その重要法案を通過せしむるに十分に全力を傾倒したのであります。しかるに林内閣が議会の最終日において，何ら正当の理由なく，突如議会を解散したることは，林内閣自ら挙国一致を破るの暴挙に出たるものであって，林内閣が非常時局を認識する資格なきことを，事実において暴露したりと信ずるのであります。

（永井柳太郎「独善内閣勝つか国民大衆勝つか」1937 年）

⑾ いわゆる今日の知識階級にありましては，単に神仏若しくは聖人を拝んで福を求むるよりは，その諸聖人の示されたるところの神仏の道徳を体得して，これを実行することが真の幸福享受の方法ならんと考うる者を生じてきたのであります。しかしながら，未だその原理が明らかにならなかったために，これを実行する人が乏しかったのでござります。（広池千九郎「モラロジー及び最高道徳の特質」昭和初期）

⑿ 顧みれば支那事変勃発以降，既に三星霜，英聖文武なる陛下の御稜威のもと，忠勇義烈なる陸海将兵の奮闘により実に空前の戦果を収め得たのであります。しかしながら，この間東亜をめぐる関係列国の動きは，益々事変の性質を複雑にし，その解決を困難ならしめておるのであります。（近衛文麿「日独伊三国条約締結に際して」1941年）

演説においては，現状が自身の考えに照らして望ましくないと述べる際に逆接の接続表現が頻りに用いられ，自身の主張において重要な事柄を導入するという点で，談話展開上大きな意味を持つ表現であると言える。

先ほどと同じく雑誌コーパスを用いて逆接の接続表現について調査を行った近藤（2021a）を参照すると，「しかるに」と「しかしながら」は「口語体地の文を中心に文語体地の文でも使用される（p.55）」語形とされている。口語体地の文が中心という点は，先ほどの順接の接続表現の場合と異なっている。この「しかるに」と「しかしながら」について，近藤（2021a）では『太陽』の口語体記事で広く使われていたとするも，また「文語体でも広く使用される書き言葉的性質の強い語形（p.63）」と指摘している。これより，「文語文でも使用される」という点において典型的な書き言葉に特徴的な，「堅い」表現としての性質を認めてよいと考えられる。このことは後で見る話し言葉的性質の強い接続表現との対比でより明らかになる。

なお，近藤（2021a）はこのグループよりも書き言葉的性質の強い一群として「主に文語体地の文で使用される（同）」語形があると述べ，そこには「しかりといえども」「しかれども」「されども」「されど」の4形式が挙げられている。このうち演説で例が見られたのは「しかれども」であり，確かに雑誌に対する出現頻度の比は3.0と高くなっている。近藤（2021a）で「口語体はその萌芽期から文語体で広く使用されていた語形を取り入れていた（p.63-64）」と述べられているように，文語体での使用が特徴的だった形式が一部口語体でも使われることがあり，それは雑誌でも演説でも同様に行われているということが分かる。

一方で，雑誌と比較して演説での使用が少ない形式，すなわち雑誌に対する出現頻度の比が1未満となっている形式としては，「しかし」「が」「だが」「けれども」「ところが」が挙げられる。「しかし」は演説において相応の使用が見られるものの，雑誌においては他の接続表現を凌駕する用例数が確認でき，相対的に演説での使用は稀ということになる。「が」「だが」「けれども」「ところが」は，そもそも演説において用例が僅少であり，それに比べて雑誌においてはいず

れもよく用いられる形式と言え，結果的に演説で用いられにくい接続表現となっている。

これらについても近藤（2021a）の指摘を見ると,「しかし」「が」「けれども」「ところが」は「口語体地の文を中心に会話文でも使用される（p.55）」語形,「だが」は「主に会話文で使用される（同）」語形とされている。ここからも，口語体を基調とした形式は，演説において使用が抑えられることが窺える。特に「会話文で使用されうる」という特徴は演説にはそぐわないと見え，上記2グループとして近藤が挙げる接続表現は全部で11形式あるが，そのうち演説でも用例が見られるのは上に挙げた5形式のみである。演説は音声として実現するものではあるものの，相当に公的な性格を帯びるためか，話し言葉的な形式は避けられることが明らかとなった。

4.2.3 添加の接続表現

また同様に，添加の接続表現についても調査を行った。その結果を以下に示す。

【表 6】雑誌と演説における添加の接続表現の出現頻度

接続表現	演説	演説（調整）	雑誌	雑誌（調整）	演説 / 雑誌
また[13]	88	20.9	3,145	9.5	2.2
しかして[14]	65	15.5	1,168	3.5	4.4
そうして	30	7.1	945	2.9	2.5
しかも	18	4.3	1,701	5.1	0.8
それから	16	3.8	1,294	3.9	1.0
さらに	15	3.6	852	2.6	1.4
そして	10	2.4	5,221	15.8	0.2
そのうえ	2	0.5	231	0.7	0.7

添加の接続表現の中で相対的に演説での使用頻度が高いと言えるものとしては,「しかして」が挙げられるだろう。「しかして」は雑誌でも頻りに用いられているが，演説で用いられる接続表現としてもかなり上位に入っている形式であり，それによって比率も高くなっていると言える。演説における用例を以下に示す。

⑬ 国を富ますは科学を進めて商工業の活動によらねばならぬ。商工業によるには，どうしても合本組織が必要である。而して合本組織をもって会社を経営するには，完全にして強固なる道理に拠らねばならぬ。（渋沢栄一「道徳経済合一説」1923年）

⑭ 帝国の所信に基き，東亜新秩序建設の指名を達せんがためには，内においては国家の総力を集中して国防力の強化を期することが，現下喫緊の要務であります。しかして国防

力の強化のためには，軍備の充実，国民精神の高揚，経済力の発展，及び，戦時国民生活の確保は，欠くべからざるものと信じます。　（米内光政「政府の所信」1940年）

「しかして」は雑誌において相応の用例数が見られるものの，時期によって大きな差がある。1917年と1925年の『太陽』ではそれぞれ744例，318例だが，1933年と1941年の『中央公論』になるとそれぞれ51例，55例にまで激減している。出現頻度にここまで極端な差が見られるのは，今回調査を行った接続表現の中で「しかして」のみである。すなわち，「しかして」はおおよそ大正期まではある程度の用例が確認できるものの，昭和以降になるとかなり使用が少なくなってしまうことが分かる。それでは演説においてはどうかと言えば，時期を大正期（1915-25年），昭和1桁年代（1926-35年），昭和10年代（1936-43年）に区分すると，用例数はそれぞれ7例，29例，29例であった。もちろん各時期のデータ量が揃っているわけではないので単純な比較はできないが，演説においては昭和以降も「しかして」の頻度が下がっていないことは認めてよいだろう。

一方で，雑誌と比較して演説での使用が少ない形式としては，「そして」が挙げられる。「そして」は雑誌において非常に頻用される形式であるが，演説ではあまり用いられておらず，雑誌に対する出現頻度の比も0.2と，演説での出現頻度は雑誌の5分の1にも満たない。この点は，類似する「そうして」と比較すると一層明確である。なお，「しかも」は雑誌に対する出現頻度の比で見ると1を下回っているが，はっきりとした差があるとは言いがたいと判断した。また，「そのうえ」に関しては演説・雑誌ともに用例数が少ないため数値のみから判断するのは難しいと考える。

添加の接続表現に関しては，雑誌における文体別の使用傾向について先行研究では直接的に明らかにされていない。そこで，『太陽』を対象に，文頭で用いられている先の8形式について1895年から1925年の用例を調査した。ただし『太陽』は時期によって文語体記事と口語文記事の比率が異なっており，近藤（2021a,b）でも示されているように，時期が新しくなるにつれて文語体の比率が下がり，口語体の比率が上がっている。そのため用例数を単純に比較できないので，各時期の文語体記事・口語体記事の総語数を調べ，1万語あたりの用例数を算出した。次に示す表は，補正後の用例数となっている。

【表 7】『太陽』における添加の接続表現の文語体・口語体別の調整頻度

接続表現	文体	1895 年	1901 年	1919 年	1917 年	1925 年
また	文語	6.12	4.50	3.77	3.74	2.64
	口語	8.06	6.08	4.81	5.06	3.44
しかして	文語	6.19	7.36	7.68	5.72	0.53
	口語	1.70	2.12	3.84	4.96	1.61
そうして	文語	0	0.01	0.01	0	0
	口語	1.31	0.97	0.53	0.99	1.17
しかも	文語	0.77	1.58	2.38	2.47	0.35
	口語	0.62	0.80	1.29	1.58	1.97
それから	文語	0.01	0	0.01	0	0
	口語	3.41	2.99	1.83	1.25	1.72
さらに	文語	0.54	0.65	0.56	0.60	0.18
	口語	0.06	0.31	0.81	0.75	0.89
そして	文語	0.01	0.01	0.01	0	0
	口語	0.68	1.32	1.84	4.82	6.35
そのうえ	文語	0.14	0.03	0.24	0.03	0
	口語	0.40	0.23	0.12	0.20	0.26

先に，演説において相対的に頻度が高いとしたのは「しかして」であったが，1917年までは文語体での記事での出現の方が多く，もとは文語体での使用が中心的であった形式だと言える。この点は，既に述べた順接・逆接の接続表現の場合と同様の傾向を見せている。反対に，演説での使用が少ないとしたのは「そして」だが，これも口語体での使用の方が多いという結果を見せており，既に確認した，口語体での使用を中心とする形式が演説で出現しにくいという傾向と一致している。

だがこのような傾向に当てはまらない形式も見られる。「しかも」は1917年まで文語体での使用に傾いており，その傾向は「しかして」と一致している。ところが表6から分かるように実際には「しかも」は演説で出現しやすい形式とは言えず，先述の傾向とは合わないことになる。同様に，「そうして」と「そして」は文語・口語比率の点では近い結果を示すものの，演説での用いられやすさは「そうして」の方に偏っている。この点も説明ができない。また，一貫して口語体での使用が中心である「また」に関しては演説に出現しにくいことが予想されるが実際にはそうではなく，先述の傾向とは一致しない。このことから，演説での接続表現の出現しやすさが，雑誌での文語体・口語体の区別と関係するという説明は，順接・逆接の接続表現の場合は概ね当てはまったものの，添加の接続表現の場合は難しいということが分かる。この背景については別途検討しなければならないが，各類型においてどのような接続表現のバリエーションがあるかという点は考慮する必要があるように思われる。

4.3 接続表現の使用と文体

森岡（1991）によれば，近代における成立期の口語体は講義や演説の筆記あるいはそれを模して書かれた文章であり，そのため敬体の文末辞が多用されていたという。明治・大正期の雑誌を調査した近藤（2021a,b）は，19世紀末までは敬体を多く用いる記事が主体であったが20世紀以降になると常体を多く用いる記事が増加し，その後常体が主たる口語文体となると述べている。また昭和・平成期の雑誌を調査した近藤（2023）では，昭和期までは常体が主であったが平成に入ると敬体の比率が増加し，2010年代には敬体による記事が過半数を占めることを報告している。すなわち，本稿でこれまで扱ってきた雑誌の文章は常体を主とするものであったということになる。それでは演説の方はどうかと言えば，本稿と同じ演説資料を用いてその文末表現を調査した田中（2016）によると，文末が敬体となっている演説は時代を下るごとに多くなり，演説文体の敬体への統一および「であります」という表現への統一の流れが指摘できるという。このように，演説と雑誌について，同時期の資料を比較対象としたものの，その文体は大きく異なっていたと言えるだろう。そこで，以下では敬体・常体という文体の側面に注目して演説における接続表現について見ていく。

まずは本調査で扱った演説資料について，文体に関する基礎的なデータを示す。近藤（2021a,b,2023）に倣い，各演説に含まれる文の過半数が敬体となっているものを「敬体多」，過半数が常体となっているものを「常体多」と呼ぶこととする。演説の時期を大正期（1915-25年），昭和1桁年代（1926-35年），昭和10年代（1936-43年）に区分すると，各時期における演説が敬体多である比率は62%（13/21），73%（41/56），75%（41/55）となった[15)]。田中（2016）が指摘する通り，特に昭和以降になると演説の主体は敬体となることが分かる。一方，本稿で比較対象とした雑誌については，近藤（2021a,b,2023）の挙げるデータを参照すると1933年に関しては敬体多が約15%，他の年代は約5%となっている。

それでは，4.2節で取り上げた28の接続表現について，当該の用例が敬体多の演説に出現しているか，常体多の演説に出現しているかを調査し，次の表にまとめた。

【表 8】出現する演説の文体から見た接続表現

接続表現	敬体多率	接続表現	敬体多率
ゆえに	49%（24/49）	しかしながら	73%（33/45）
そこで	88%（22/25）	が	90%（9/10）
従って	91%（20/22）	だが	80%（4/5）
それゆえ	43%（9/21）	けれども	20%（1/5）
で	50%（10/20）	しかれども	75%（3/4）
ここにおいて	45%（9/20）	ところが	50%（1/2）

かくて	81%（13/16）	また	67%（59/88）
されば	40%（6/15）	しかして	74%（48/65）
しからば	17%（2/12）	そうして	83%（25/30）
だから	22%（2/9）	しかも	61%（11/18）
よって	83%（5/6）	それから	69%（11/16）
その結果	67%（4/6）	さらに	87%（13/15）
しかるに	53%（50/95）	そして	50%（5/10）
しかし	74%（40/54）	そのうえ	100%（2/2）

この結果と，4.2節で挙げた雑誌に対する出現頻度を照らし合わせて検討してみたものの，はっきりとした傾向は見出せなかった。敬体多の演説で用いられやすい接続表現だからといって演説で用いられにくいとした「口語体での使用を中心とする形式」であるとは限らないし，その逆，すなわち常体多の演説で用いられやすい接続表現が「文語体での使用が中心的であった形式」だとも言えない。また，そもそもの用例数が少ない接続表現に関しては数値で比較することが適当でないと思われ，上記の表ではデータを示したものの，厳密な検証は難しいという結果になった。

とはいえ，演説全体の傾向として7割程度が敬体多であることから分かるように，多くの接続表現が敬体主体の演説で用いられているという点は指摘できる。これは近藤（2021a,b）の指摘と照らし合わせて考えた時，重要となってくる。

> 「太陽Ⅰ」「太陽Ⅱ」では敬体多・常体多を問わず書き言葉的性質の強い語形が広く使用されていたものが，「太陽Ⅲ」～「太陽Ⅴ」に至り，敬体多では書き言葉的性質の強い語形はほとんど使用されなくなるのに対し，常体多では書き言葉的性質の弱い語形に移行しつつも，書き言葉的性質の強い語形も広く使用されていた[16]（近藤2021b：p.130）

すなわち，本稿で比較対象とした時期における雑誌では，敬体多の記事では「書き言葉的性質の強い語形」はほとんど使用されていなかったのである。4.2節で行ったコーパス調査では常体多の記事も対象としていたので，得られた結果は常体多の記事における用例を大きく反映したものであったと考えられる。近藤の言う「書き言葉的性質の強い語形」とは「ゆえに」「されば」「よって」「しかるに」「しかしながら」「しかれども」等が該当する。これらの接続表現は，表8を見ると敬体多の演説における用例は特に少ないということはなく，敬体多の記事ではほとんど用いられないという雑誌での状況とは大きく異なっている。これらのことから，同じく敬体で語られる文章・談話といっても，雑誌と演説とでは接続表現の使用状況はかなり違ったものであると言うことができる。

先に挙げた近藤（2021b）の指摘を見ると，常体多の雑誌記事においては「書き言葉的性質の強い語形」が広く使われていたことが分かる。この具体例は先ほども挙げた通りだが，4.2節で順接および逆接の接続表現について考察する中で述べたように，雑誌に比べて演説での使用頻度が高かった形式である。これらの接続表現は常体多の記事においてよく用いられるのだから，接続表現の使用状況という観点から見れば，演説に近いのは敬体の雑誌よりも寧ろ常体の雑誌であると考えられる。つまり，常体の雑誌のような「書き言葉的性質の強い」接続表現を用いながら，文末辞は敬体となっているのである。これより，演説が音声として実現するものでありつつ，雑誌に代表されるフォーマルな書き言葉に類する特徴を持っていることが示唆される。

その背景として，矢島（2016）の指摘する話し言葉資料と比較した際の演説の文体を特徴づける4つの要素を挙げたい。すなわち，コミュニケーションスタイルが一方向性であること，表現内容が「こうあるべし」「客観的である」ということ，表現意識が「こうあるべし」を主張していること，表現方法が正確かつ公的に伝えることを意識していることである。演説に見られるこれらの要素は，雑誌記事，とりわけ論説文といった文章には典型的に見られるものと思われ，結果として演説と雑誌とで接続表現の使用に類似が見られたと考えられる。今回は幾つかの接続表現について調査したに過ぎないが，他にどのような言語要素を調査すれば同様の傾向が認められるのか，あるいは別の傾向が読み取れる要素は何なのかという点は，今後も継続して問題となるだろう[17)]。なお，演説において敬体が主体であり，田中（2016）の述べるように時代を下るにつれ丁寧な述べ方になっていくことに関しては，伝達する相手すなわち聴衆が話者の目の前にいるという音声言語の特徴が大きく関係するものと思われる。演説の言語的特性は，その媒体が有する性質の影響を受けて生じたものと言えるだろう。

5. おわりに

本稿では，近代の演説における接続表現の使用について述べてきた。全体的な傾向としては，一般的な書き言葉よりは出現頻度が高いものの，講義のような話し言葉視資料ほどには頻繁に用いられるわけでないと言える。ただ，演説が一定以上の接続表現使用が認められる言語資料であることは示された。具体的な接続表現について見ていくと，順接・逆接の接続表現に関しては雑誌において文語体を中心に用いられる形式の方が相対的に出現頻度が高く，口語体を中心とする形式は頻度が下がることが明らかとなった。これはすなわち，演説が音声として実現するものであっても，典型的な書き言葉に近い性質を見せることを示唆していると考えられる。ただし，添加の接続表現についてはそうした傾向は必ずしも当たらないようである。また敬体・常体という点から見ると，演説は敬体を基調としつつも，雑誌と比較すると敬体の記事とは様相が異なり，常体の記事の方が近い特徴を有していると言うことができる。

本稿は基本的なデータを収集することによって全体としての傾向を示そうという目的が大きく，厳密な議論に至っていないところがある。書き言葉における文体との関わりについては，どのような点をもって文語体あるいは口語体を中心とすると言えるのか，なお検討しなければならないと考える。個別の接続表現についても未だ明らかでない点が大きく，特徴的な形式を抽出し，その語史を記述していくことも必要である。また現代語における接続表現の文体研究について詳しく触れられなかったが，現代語への連続性を考える以上，その知見を踏まえて考察することが求められるだろう。同様に，現代の演説と比較することで近代語独自の特徴や通時的な変遷の解明へと視野が広がっていくが，資料の選定には課題も残る。課題は山積しているが，演説資料の分析には大きな可能性があると言えるだろう。

注

1) この記述は 1988 年 5 月に行われた第 59 回近代語研究会における「演説レコード資料の可能性」と題した清水氏の研究発表でまとめられているものだが，当該の発表資料は未見であり，本稿ではこれを引用している金澤（2016）に拠った。

2) 接続表現の二重使用に関しては，最初のもののみ数えた。なお本調査において，二重使用（最初の接続表現が文頭に現れている場合）の例は 13 件確認された。

3) 一人の人物が複数の演説・講演を行っている場合があるので，演説数と演説者数は一致しない。同一人物が行った演説・講演が必ずしも同じような接続表現の使用傾向を見せるとは限らないが，ここでは便宜上，人物ごとに考えることとする。なお，単体の演説で見た際の接続表現使用率の最も高かったのが，平池千九郎「モラロジー及び最高道徳の特質」の 90%（17/19），次いで木村清四郎「私の綽名「避雷針」の由来」の 64%（14/22）となっている。反対に，接続表現使用率の低い演説としては 0%，つまり全く接続表現のない演説が 8 本あった（その中で総文数の最も多いものとしては，36 文から成る演説がある）。

4) 演説者ごとに見た演説の総文数に関するデータを示すと，最小値は 5，第 1 四分位数は 19，第 2 四分位数（中央値）は 28，第 3 四分位数は 52，最大値は 288 である。平均値は 47.3，標準偏差は 53.4 であった。なお，総文数の多い方が接続表現の頻度が下がるということはなかった。総文数が 100 を超える人物でいえば，松岡洋右が 37%（70/190），尾崎行雄が 35%（96/272）であり，逆に東條英機が 8%（15/187）と比率の低い場合もある。

5) 石黒ほか（2009）で調査された資料のうち，最も接続表現の出現頻度が低かったのがシナリオで，約 3% である。これは対話を中心に構成される資料で，他の書き言葉資料とは大きく性質の異なるものである。

6) 例えば東郷平八郎や東條英機など。軍人に多いようにも思われるが，はっきりとした傾向は示せない。具体的な例としては次のような演説が挙げられる。

・大日本は皇国なり。万世一系の天皇上におわしまし，肇国の皇謨を承継して無窮に君臨し給う。皇恩万民に遍く，聖徳八紘に光被す。臣民また忠孝勇武祖孫相承け，皇国の道義を宣揚して天業を翼賛し奉り，君民一体，以てよく国運の降昌を致せり。（東條英機「戦陣訓」1941-42 年）

7) 頻度が 10 例以上のものを示しており，これらの接続表現で全用例の 73.6% を占めている。なお，本調査で得られた接続表現は異なりで 85 形式である。

8) 石黒（2010）で報告されている用例数を見ると，順接が計 1,458 例，逆接が 157 例となっている。順接の接続表現のうち「で」が 1,108 例を占めているのでそれを除外して考えたとしても，順接の出現頻

度は逆接の 2 倍以上になっている。

9) 雑誌における文数の算出に際しては，検索対象を前述のものに設定した上で，「中納言」での検索条件を品詞「補助記号 - 句点」「補助記号 - 一般」「補助記号 - 括弧閉」として検索を行った。「補助記号 - 句点」に関しては全例を文末と認定しているが（該当するのは“。”“.”“！”“？”の 4 形式），後者 2 つに関しては述語形式が現れるものに限っている（おおよそ“…”“—”“」”“』”“)”が該当した）。このような処理を行い，雑誌における総文数は 330,905 文と算出した。ただし，正確な判定は難しく，参考値として捉えられたい（このうち「補助記号 - 句点」で 94% を占めており，大体の傾向は反映されていると思われる）。

10) A とは先に見た「ここにおいて」が含まれる主に文語体で使われる語形のグループ，C とは「だから」の含まれる主に会話文で使われる語形のグループのことである（「それゆえ」「その結果」の含まれるグループが B である）。

11) この点を踏まえると，「で」を順接の接続表現とすることに疑問が生じる。本稿では調査結果を示す都合上，市川（1978）の類型に従ったが，「つけ加え」という用法を考えると寧ろ添加の接続表現とした方がよいかもしれない。

12)『日本語歴史コーパス』では「しかれども」は「語彙素：然る」+「語彙素：ども」で検索できるが，『昭和平成書き言葉コーパス』は同様の条件では検索できず，「語彙素：然れども」と条件を設定する必要がある。ところが語彙素「然れども」は「されども」として登録されており，同じ語形なのか疑義がある。なお複雑なことに，前述の条件で検索した用例は『太陽』『中央公論』ともに「然れども」と表記されており，少なくとも表記上は同じである（『太陽』には読み仮名の振ってある例もあるが，『中央公論』にはない）。そのため厳密には『中央公論』の用例はどのような語形なのか判断できないが，時代的に隔たっていないことと，同一表記であることから『中央公論』の「然れども」の例は「しかれども」として扱う。なお，『太陽』においても「語彙素：然れども（されども）」で検索することは可能であるが用例は 9 例しかなく，表記も全て「然ども」となっていた。

13)「または」「またしても」「またの～」といった，文頭に「また」が出現していても接続表現としての「また」の例でないものは除いている。後述するコーパス調査においても同様。

14)「しかして」と「しこうして」の両方の語形を含む。演説の文字化資料では「而して」に振り仮名が付されている場合があるものの，全ての用例に対してではない。

15) 演説の本数が 2.1 節で示したものと合わないのは，戦後に行われた演説が 3 本あるためである。

16) 近藤（2021a,b）では『太陽』の発行年に応じてⅠ～Ⅴの記号を充てており，Ⅰ:1895 年，Ⅱ:1901 年，Ⅲ：1909 年，Ⅳ：1917 年，Ⅴ：1925 年となっている。

17) 演説における条件表現を調査した矢島（2016）では，話し言葉資料と比較した上で演説での使用に特徴が見える形式として「以上」「限り」「場合」「結果」「ために」「ことによって」，演説での使用頻度が低い形式として「たらば」「と」が挙げられている。

参考文献

相澤正夫・金澤裕之（編）（2016）『SP 盤演説レコードがひらく日本語研究』笠間書院

石黒圭（2010）「講義の談話の接続表現」佐久間まゆみ（編）『講義の談話の表現と理解』pp.138-152，くろしお出版

石黒圭・阿保きみ枝・佐川祥予・中村紗弥子・劉洋（2009）「接続表現のジャンル別出現頻度について」『一橋大学留学生センター紀要』12，pp.73-85，一橋大学留学生センター

市川孝（1978）『国語教育のための文章論概説』教育出版

落合哉人（2018）「LINE と対人場面における接続詞の出現傾向について」『日本言語文化』42，pp.7-31，韓國日本言語文化學會

金澤裕之（2016）「［資料解説］SP 盤レコードと岡田コレクション」相澤・金澤（編）（2016）pp.7-22 所収

工藤浩（1977）「限定副詞の機能」松村明教授還暦記念会（編）『松村明教授還暦記念 国語学と国語史』pp.969-986，明治書院
近藤明日子（2021a）「明治･大正期の書き言葉における文体と語彙の通時的変化―逆接の接続詞を例に―」近代語学会（編）『近代語研究』22，pp.47-67，武蔵野書院
近藤明日子（2021b）「明治・大正期の書き言葉における文体と語彙―順接の接続詞を例に―」田中牧郎・橋本行洋・小木曽智信（編）『コーパスによる日本語史研究 近代編』pp.115-136，ひつじ書房
近藤明日子（2023）「『昭和・平成書き言葉コーパス』雑誌レジスターに見る順接・逆接の接続詞の通時的変化」言語資源ワークショップ 2023 発表予稿集
清水康行（1988）「東京語の録音資料―落語・演説レコードを中心として」『国語と国文学』65-11，pp.129-143，東京大学国語国文学会
田中章夫（1984）「接続詞の諸問題―その成立と機能―」鈴木一彦･林巨樹（編）『研究資料日本文法 4 修飾句･独立句編 副詞・連体詞・接続詞・感動詞』pp.81-123，明治書院
田中牧郎（2016）「演説の文末表現の変遷―明治時代から昭和 10 年代まで―」相澤・金澤（編）（2016）pp.248-270 所収
馬場俊臣（2018a）「接続詞の文体差の計量的分析の試み―『BCCWJ 図書館サブコーパスの文体情報』を用いて―」『北海道教育大学紀要 人文科学・社会科学編』69-1，pp.1-14，北海道教育大学
馬場俊臣（2018b）「接続詞の文体差の探索的分析―『BCCWJ 図書館サブコーパスの文体情報』5 指標を用いて―」『札幌国語研究』32，pp.1-8，北海道教育大学国語国文学会・札幌
平川八尋（1991）「理工系講義に現れる接続表現の分析―教材作成のための基礎資料分析―」『長岡技術科学大学言語・人文科学論集』5，pp.93-102，長岡技術科学大学
森岡健二（1991）『近代語の成立―文体編―』明治書院
矢島正浩（2016）「条件表現の用法から見た近代演説の文体」相澤・金澤（編）（2016）pp.194-222 所収
劉洋（2023）「明治時代の話し言葉における接続詞「で」の意味･用法―接続詞「それで」との比較を兼ねて―」第 403 回日本近代語研究会発表資料

調査資料

金澤裕之・相澤正夫（編）（2015）『大正・昭和戦前期 政治・実業・文化 演説・講演集―SP 盤レコード文字化資料―』日外アソシエーツ
国立国語研究所『日本語歴史コーパス 明治・大正編 I 雑誌』（データバージョン 2023.03，中納言バージョン 2.7.1）／『昭和・平成書き言葉コーパス』（データバージョン 2023.05，中納言バージョン 2.7.2）

付記

本稿は，近代語学会2023年度第1回研究発表会（於：白百合女子大学）における口頭発表に加筆・修正を施したものである。席上，貴重なご教示を賜った方々に深く感謝申し上げる。また，私的な研究会の場においてもご意見を頂戴した。併せて感謝申し上げる。なお，本稿はJSPS科研費23K12189の助成を受けたものである。